

子どもの「社会力」の獲得と親密圏としての コミュニティづくりの必要性に関する研究

田中 利則^a

^a 湘北短期大学保育学科

【抄録】

昨今、核家族化や地域、企業社会における人間関係の希薄化を背景として、我が国の家族や子どもに関する多様な問題が発生している。特に、学校においては子どものいじめや嫌がらせ、学内暴力等に関する問題が数多く発生し、年々解決できにくい事態として社会問題化してきている。

本研究では、これらの問題が生じている起因の一つとして子どもが「社会力」を獲得する機会が激減していることに着目して、子どもが「社会性」を獲得しやすくするための新たなコミュニティの創造の必要性について論じる。

【キーワード】

子ども 教育問題 社会力 コミュニティ

はじめに

昨今、我が国の家族や子どもの抱える問題は多岐に渡っている。特に、核家族化や地域、企業社会における人間関係の希薄化は多様な問題をつくり出している。そのなかで教育にかかわる問題も数多く散見される。特に、学校においては子どものいじめや嫌がらせ、常軌を逸脱したからかい、学内暴力等に関する問題は数多く、子どもや教員を巻き込み、年々解決できにくい事態として社会問題化してきている。また、いじめられた子どもや嫌がらせを受けた子ども、暴力を受けた子ども等が心身に支障をきたし、心理学や精神保健の専門家が取り扱わざるを得ない病理的な問題を抱えてしまっている理由から、年齢的に大人になった

としても社会人として活動できないままに自宅に引きこもったり、病院に長期入院する事態に陥ったりしていることは周知されている。

これらの学校教育の問題の根底にあるのは、いわゆるガキ大将をリーダーとした「缶けり」や「陣取り」、「初めの一歩」、「鬼ごっこ」等の「ごっこ遊び」を代表とする子どもが群れあって、遊ぶ形態が消滅してしまったことが起因の一つとなってしまうのではないかと推察されている。群れ遊びを経験する機会が減少するなかで、子どもはリーダーの役割やフォロワー（つき従う者）の役割の両方を経験する機会を奪われている。また子どもは人間関係が希薄になるなかで、創意工夫する者や自然のなかでさまざまな経験をしながらユニークな発想を提案できる者等が育ちにくい環

境におかれたままである。特に、社会でスムーズに生き抜くために必要不可欠である「社会力」や、その「社会力」を獲得するために欠かせない「コミュニケーション能力」を獲得できにくい環境が子どもにもたらす影響は甚だしいものがある。

本稿では、これらの事態を背景として、かつて群れ遊びが担ってきた多様な教育的機能を、どこで、どういう方法で確保していけば良いのかについて検討する。そして、具体的な提案として、子どもの「社会力」を高める親密圏（家族や友人、恋人、共通関心で繋がる仲間等）の必要性について提案する。

1. 我が国の社会の変化と子どもへの影響

ジャーナリストの故筑紫哲也は人生の最後の執筆となった著書『スローライフ』（岩波新書・2006年）のなかで、日本の子どもたちについて、「世界中で、こんなに街のなかでも野や山でも子どもが遊んでいる姿が見当たらない国は他にない。こんなに瞳に光がない子どもたちが多い国も他にない」と記述している。同様に、日本を代表する建築家の安藤忠雄は「私の履歴書31」（日本経済新聞朝刊・2011.3.31）のなかで、「（前略）経済大国と言われ始めた1969年ころから実直な国民性が色あせてゆく道を辿り、1970年の三島由紀夫の防衛庁占拠・割腹事件は、今思えば、それ以降の日本の凋落を暗示する警鐘だったかもしれない。人々は考えなくなり、闘わなくなった。経済的な豊かさだけを求め、生活文化の本当の豊かさを忘れてしまった」と我が国の社会が本来持つべき姿を失ってしまったことを嘆いている。

この二人の知識人の言葉は、我が国の未来を担う子どもたちが健全な素養を持った大人として成長しやすい環境についてあらためて検証する必要性を促している。また、彼らは我が国の国民が高

度経済成長を経験するなかで、如何なる不安感をも持たないままで暮らすことが日常的になっている現代社会に警鐘を鳴らしている。そして、我が国の国民全体が年を経るごとに歴史や文化、思想、哲学等への関心が薄れ、子どもや大人の生活は諸外国の動向に鈍感となる内向きな傾向を示すようになり、特に文化や社会、政治の領域においては知識や情報の深まりを求めない生活に傾いてしまっている危険性を指摘している。

1960年代以降、我が国は徐々に経済的に豊かになり、テレビや冷蔵庫、洗濯機、ステレオ、自動車等が徐々に一般家庭に普及するようになった。その一方で、家族や子ども同士が外で遊ぶ機会や交流する機会を失う事態に追いやられてしまった。それと同時に家族という集団にも崩壊する予兆が見え始め、家族員のコミュニケーションの質や量が低下する気配が散見されるようになった。これらの状況のなかで、我が国の国民の大半は年を経るにしたがって自宅や自分の部屋の中にもこもりがちとなり、しかも家族同士の生活活動にズレが目立ち始める事態を迎え、加えて、それぞれが自分の部屋でテレビを見たりゲームをしたりしながら居心地の良い時間を過ごすことを優先するようになってしまった。そして、これらの状況が長く続いたために、国民の意欲や競争心、体力等が衰え、あるいは他者への関心度が低下する状況を招き、ひいては未来に向かって輝くはずの子どもが瞳も光を失ってしまう事態に陥ってしまう結果を招いてしまった。

この当時、日本の社会では「3つの間が無くなった」ことを問題視するようになってきている。「3つの間（「さんま」とも言われる）とは、つまり「遊ぶ時間」と「遊ぶ仲間」と「遊ぶ空間」がなくなったということである。1960年の初め頃から高度経済成長期に入った我が国は都市部の再開発を急ピッチで進めることになった。また、その結果と

して、空き地は高層ビル街となり、川や海は埋め立てられ高速道路に変わった。さらに、山は切り崩され、その傾斜には整列された住宅が立ち並ぶといった光景が全国的に見られるようになり、子どもの居場所や遊び場所が急激に減少した。そして、1970年代になると、子どもの高校や大学への進学競争が激しくなり遊ぶ時間もなくなってしまいう傾向が見られるようになった。その結果として、外で遊ぶ子どもが少なくなれば、当然、群れて遊ぶ光景も見られなくなり、遊び仲間も消えていった。これらを背景として、「社会力」や「コミュニケーション力」を身につけられていない子どもが示す行動が社会問題化し、それと同時に、瞳の輝きをなくした子どもに出会う機会が多くなっていることが教育や福祉の世界の話題となる機会が増していった。

これらの事態のなかで、子どもの世界でも大きな変革が始まる。例えば、古代から見られた「ごっこ遊び」を中心とした「群れ遊び」の文化が1970(昭和45)年以降から次第に姿を消してして行く道を辿り始めた。旧来から、「ごっこ遊び」を通して学んできたさまざまな役割の疑似体験やこれまで遊びのなかで獲得してきたリーダーシップやコミュニケーション能力等の人間の成長に欠かせない素養を身につける機会を失う事態を迎えることとなった。つまり、人間が生活して行く上で欠かせない「社会力」を備える機会を、下手をすると失いかねない状況下に陥る危険性が高まった¹⁾。

それでは、ここで言う「社会力」とはどのような資質能力のことを意味するのか、あらためて問い直してみたい。具体的に言えば、「人が人とながり、社会をつくる力」のことであると考えることが妥当なのかもしれない。これだけでは理解しにくいと思われる理由から、さらに説明を加えるとすると、「社会力」とはさまざまな人と適切な関係を作ることができ、その良い関係を維持し

ながら、社会の一員であるという自覚をもって、自分が学んだ知識や身につけた技術等を、自分が普段生活している多様な場所で、例えば、家庭であるとか、地域であるとか、職場とかで、進んで発揮することができる、そのような能力のことであるということができる。すなわち、より良い社会を作ろうという前向きな意識と意欲があり、そのために何をすれば良いかを自分で考えたことをできるところから実行に移していく、そうした、いわば構想力と実行力があることも「社会力」があるということになるのではないかと思う。

2. 「社会力」を身につけるうえで大切な時期

人の子は誰もが大人と直接かかわり応答するために必要な能力を生まれながらにして備えている。これまで、長く、人間の子どもはまったく無能力な状態で産まれてくるといわれてきたが、ここ30年ほどの新生児の研究によって次々と明らかにされてきたことは、人の子はきわめて高度な能力を備えて産み落とされているという事実である。それでは、赤ちゃんが備えている高度な能力とはどのようなものであるかについて考えてみる。それらは、例えば、言葉として発せられる音を聞き分け、それを聞き取ることができる能力であり、人の顔、とりわけ大人の顔を正確に見分けることができる能力である。つまり、他人の目の動きや顔の表情からその人の意図や感情を見抜き、それを模倣することができる能力である。加えて、自分が今行った行為がどのような結果を引き起こすことになるかを予め推測し、次の行為に備えることができるといった数々の能力である²⁾。生まれたばかりの赤ちゃんが備えている能力のどれもが高度な能力であることに驚かされる。それでは、何故に、人の子がこのような高度な能力を予め備えている必要があるかについて考える必要があ

る。答えは一つである。そうした能力をフル稼働させることで大人と直に交わり応答を重ね、そうすることで「社会力」のおおもとである他者への関心と愛着及び信頼感を培い、それをもとに一層大人との相互行為を重ねることで脆弱な「社会力」を強化し、社会的動物として自らを形成していくためである。「社会力」を身につけるために欠かせない条件とは、大人との相互行為、すなわち大人との直接的な交わりであり、大人との協働行為である。子どもは大人と直接交わり、活動とともにし、ともに泣き笑いすることで、「社会力」の芽を育て、強化し、社会的な動物として成長していくことになる。「社会力」を育てることで、高度な能力を身につけ、結果として、他人の気持ちや立場を理解できる人間となり、学習意欲を高め、学力を向上させ、そして、社会の一員としての自覚をもち、社会の発展に貢献できる人間として成長していくのである。子どもは大人と直接交わり、活動とともにし、ともに泣き笑いすることで、「社会力」を育て、強化し、社会的な動物として成長していく道を進む³⁾。

そして、これらの状況のなかで子どもは年を重ねるにしたがって、①知的社会性（挨拶できる、協力できる等）、②世代間交流（近所の人に声をかけられる、近所に馴染の大人がいる等）、③ふるさとへの愛着（ふるさとが自慢である、将来、ふるさとに貢献したいと思う等）を獲得できるようになり、生きて行く中で降りかかるさまざまな問題や課題を乗り越えたり解決したりすることが可能となる力を獲得することができる（図1参照）。

①知的社会性

- ・ 近所の共同作業に参加する
- ・ 仲間や近所の人と協力ができる
- ・ 周囲の人の手伝いができる
- ・ 自分の意見を周囲の人に言える
- ・ 周囲の人の話を聞くことができる

- ・ 周囲の人に気配りができる
- ・ 知らないことを調べることができる
- ・ 状況に応じて適切な行動ができる
- ・ 必要に応じて相違工夫ができる等

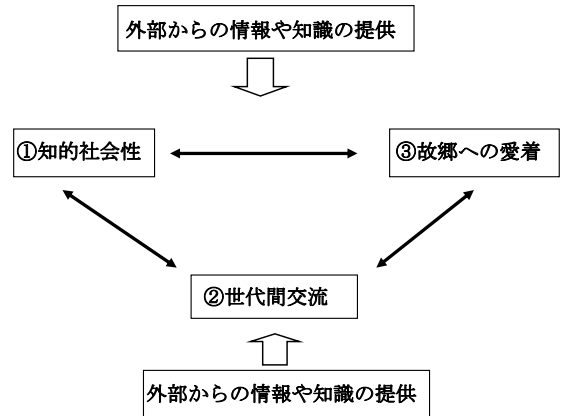


図1 社会性の育成に関する基本的な構造

②世代間交流

- ・ 近所の共同作業に参加する
- ・ 大人に交じって地域貢献する
- ・ 近所の人に気軽に声をかけられる
- ・ 近所に馴染の大人がいる
- ・ 何かと相談できる大人がいる
- ・ 近所に見習いたい大人がいる
- ・ 困った時気軽に相談できる大人がいる等

③故郷への愛着

- ・ 生まれ育った故郷が好きである
- ・ 慣れ親しんだ地域が好きである
- ・ 通っている学校が好きである
- ・ 将来、可能ならば故郷に住みたいと思う
- ・ 可能ならば故郷で家庭を持ちたいと思う等

出所:門脇厚司『社会力を育てる—新しい「学び」の構想』(岩波新書、2010年)を参考にして、執筆者が作成。

3. 「社会力」獲得の支障となるもの

子どもが「社会力」を獲得するうえで、欠かせ

ない条件とは大人との相互行為、すなわち大人との直接的な交わりであり、大人との協働行為である。このことは先の章ですでに述べている。ところが、高度経済成長期以降の我が国では、生活空間の激変やコミュニティの崩壊、あるいはテレビやテレビゲーム、PC、スマートフォン等の普及で、子どもと大人との直接的な交わり、交流、協働作業等が著しく減少する事態を迎えている。その結果として、子どもたちの社会的異変をもたらし、「社会力」の衰弱を引き起こす事態を迎えているのは理論上必然であったというしかない。

特に、1970年代に入り、ゲーム依存生活への過度な浸透が始まったことが、子どもの社会性の脆弱化を問う意味では重要な価値があるのではないかと思われる。サーキットコースを走り抜ける「スピードレース（1974年）」、2人対戦プレイが楽しめる野球ゲームの「ボールパーク（1976年）」、敵の車両めがけてミサイルを発射する「ミサイルX（1977年）」、レトロゲームの定番「ブロック崩し」等が先駆けである。また、2000年以降になると、ゲームがITゲームとして形態を換え、今やPC、スマートフォンでも気軽に楽しめる時代を迎えている。実はこれらのゲームの普及が、大人と子どもとの相互行為、すなわち大人との直接的な交わりや一層大人との協働行為を行う機会や交流を減少させるという結果に陥らせさせてしまった⁴⁾。

これらの理由から、1970年代以降に学校生活を過ごした子どもは、ある意味で、「社会力」を獲得しにくい時代に人間性を形成するうえで大切な幼児期を過ごしたことになる。例えば1970（昭和45）年に生まれた子どもは、2018（平成30）年現在では48歳になっている。そのなかで小学生時代や中学生時代に学校が荒れるなかでいじめをしたり、いじめられたりしながら育ってきた人々が現在では年を重ね、社会において中核をしめる働き手となっている。つまり、「3つの間が無くなっ

た」時代の弊害が危惧され始められた時期に子どもとして生まれ、そして成長期を歩んできた者が現代社会の中核を占めるようになってきていることから問題は深刻である。

つまり、我が国の社会の人間関係が希薄となり、大人と子どもとの相互行為や大人との直接的な交わりが少なくなるなかで幼児期を過ごした子どもが大人となり、「社会力」を育てる機会を得ることができないままに大人となっていることを自覚しないままに結婚し、子育てを見よう見まねで行っている可能性が高いことを否定することはできない。もちろんすべての大人が負の因子を持っている訳ではない。具体的に言えば、育児放棄や虐待等に走っている訳ではない。しかし、近年の中高年の大人が引き起こす犯罪傾向や生活が破綻している実態を概観してみると、少なからず上記の予測が成り立つように思えてならない。しかも、確実に子どもにも同様のリスクを感じ取ることができる。そのためにモンスターペアレントや小学生の教師に対する暴力は突然、現代社会で突然始まったことではではないと推察するほうが的確である。なぜなら、歪んだ子ども時代を過ごした大人が育てている子どもが登校しているのが、近年の学校だからである。そして、現代の教員は、長年、「社会力」が低下した子どもや大人の負の連鎖が生み出すモラルや学力の低下などの多様な問題を抱える子どもの対応に追われ、心を病むほど悩み苦しみ、子どもや保護者に過剰な気配りをしながら職場で格闘している⁵⁾。

これらの問題に加えて、生涯学習時代やグローバル化の対応を図るために学校改革にも積極的に採り組むことが求められているのが現代の教員の姿である。そのなかでストレスを要因としたうつ病や神経症などの精神科の病に蝕まれる教員も増加傾向にあり、定年を待たずに早期退職する者も多く見られる。

4. 子どもの「社会力」を高めることができる環境

子どもが心身ともに健康に育つためには生まれた直後からの大人との応答が欠かせない。子どもの「社会力」を養成し、一人前の人間として育て、社会に貢献できるような人間に成長させるためには、大人こそが機会を多く作って子どもと交わり、子どもに適切にかかわり続けることが何よりも大切なのである。前文で「子どもに適切にかかわること」と記述したが、子どもに対し、適切なかわりやりとりができる能力を備え、スムーズな対応をすることこそ、大人の責任なのである⁶⁾。大人はこのことをしっかりと心得ておく必要がある。その上で、大人は、今、具体的に何をすべきなのかについて丁寧に考察し、子どもが健全な人間力や「社会力」を育てられる環境を整える必要がある。子どもにとって適切な環境とは、「もの」環境と「ひと」環境の両者がともに好ましい形で備わった環境のことである。好ましい「もの」環境とは、多様な刺激に満ちた環境であり、好ましい「ひと」環境とは、多様な資質を有した大人や子どもがそこにいて、随時、彼らと交流できる環境のことである。我が国でいえば、高度経済成長期以前の地域社会はそうした条件を備えていた。山や川、田んぼや畑があり、原っぱや空き地があり、四季折々の変化があり、地域の人的交流も濃密であった。そうした環境があったからこそ、親や教師に多少の問題があったとしても、子どもたちは健やかに育ち一人前の「大人」になることができたのである。

しかし、現在、子どもたちが育つ環境は相当劣化している。我が国の子どもの4人に3人が都市部で生まれ育っている。そして、都市部は、「3つの間が無くなった」どころか、テレビやテレビゲーム、PC、スマートフォン等の席卷をゆるし、

そこに長く身を置けばおくほど、心身の成長が害され蝕まれるようなシステムが出来上がっている。こうした環境の劣化は農村部とてさほど変わりはない。それでは我々はどうすれば良いのか考えなくてはならない。ここでは最も急を要する二つのことを提案したいと思う。まず一つは大人自身が一層「社会力」を高める努力をし、子どもの適切な対応者や共同行為者、協働者等になることである。言い方を換えれば、大人が一人前の「大人」として、一人の「市民」として、当たり前のことを当たり前のこととして行うよう努め、日常的に行うことである。二つは子育てや教育のために地域の人的、物的、自然的資源をフルに活用する体制をつくり実践することである。そのための具体的な施策として、冒険遊び場のような大人が常に居る遊び場を作り運営することや、せめて土曜日、日曜日、祝日等はテレビやテレビゲーム、PC、スマートフォンから離れて家族同士のかかわりを優先し、そして月に一日程度の頻度で大人と子どもと一緒に活動を企画し運営する地域ぐるみで実行することが必要とされている⁷⁾。

5. 子どもの社会力を高める親密圏としてのコミュニティづくりの必要性

都市化や産業化が進むにつれて、我が国では伝統的な地域社会が崩壊し、高学歴社会ができあがることによって、身分によってではなく能力と業績によって社会的な地位が諸個人に配分されるというメリトクラシーの原則にもとづく競争主義が推し進められてきた。また、経済生活を優先することによって個人間の分断を広げ血縁と親愛の情によって結び付くとされた家族までもがその結び付きを弱めていくことになった。これらの理由から、子どもたちは「心を閉じた自分」として自分の殻に引きこもるか、自分についての確かな認識

と自分の居場所を見出せぬまま「浮遊する個人」として社会の中をさまよひ歩くという状況が一層進みつつある⁸⁾。厚生労働省・2017年調査では、定職に就くことなくアルバイトで生計を立てるフリーターの総数は推定155万人(15歳～40歳)、適齢期になっても結婚せず親元に寄生し続けるパラサイトシングル推定52万人(35歳～44歳)、そして他の誰かとかかわることなくひたすら自室にこもり続ける引きこもりが推定25万5000人となっている。彼らは幼少時から大人との接触がないゆえに他者への関心をなくしている。そのため他者と行為を交換することを求めない。また彼らは他者との相互行為を試みない理由から他者を理解することすらできないままである。したがって彼らは他者を理解しえないことから他者に共感する術すら知らない。こうして現代の若者や子どもたちは際限なく他者とのかかわりをなくし、社会から離脱していくことになる。そして「社会力」が低下した人間が多数になった時に社会が崩壊の危機に瀕する事態を迎えてしまう。

そのなかで、「社会力」を獲得でききれていない人間が増える原因が、地域であれ学校であれ家庭であれ、子どもたちが他者とりわけ大人と直接的に交わり相互行為する機会と場を無くしていることにあるとすれば、問題の解決はどのようにして子どもが大人と親しく交わり相互行為する場を作り出すことができるか重要になってくる。新しい交流の場所、友人や家族、恋人や仲間等、無条件で自己に眼差しを向けてくれる人間同士の空間である、コミュニティとしての「親密圏」をどこにどのように作り出せるかということで子どもの生活空間が地域の他にないとするれば地域社会を新しい交流の場に仕立てあげるほかない⁹⁾。つまり、その子を産んだ当事者である父親と母親だけにその子の養育と世話を押し付けるのではなく、その子が住む家の近くに住みお互いに知り合いである

人々が入れ替わり立ち替わり、日常的にその子とかかわり相互行為を繰り返し、「親切にすること」や「感動すること」、「感情を表に出すこと」、「精神的に支えられること」、「スキンシップが図れること」等を可能とする空間であることが望ましい。それが新しい交流の場所のイメージである。特別に意図しなくても日常的に出会える範囲であることが望ましいが、地域的な広がり新しい交流の場所の場合、さほど考慮する必要はない。最も重要なことは、互いに相手を自分の心の中で受容している人たちが地域に複数いて、日常的に何らかの交流がなされているとすれば、そこに交流の場所があるということである。近年「地域の子は地域で育てる」という合い言葉を耳にすることが多くなっている。実際に、そのように考え日常的にそうすることを心掛け、実行している人たちがいる地域は新しい交流の場所を形成していると考えられる。

参考文献

- 1) 窪 龍子・猪狩芳子・野田 耕「幼児期の生活と遊びに関する研究」(『実践女子大学社会学部紀要、第三号、1頁～16頁、2007年)
- 2) 岩山和子「赤ちゃんの能力と新生児行動観察法」『周産期医学』(東京医学社26(1)、73頁～80頁、1996年)
- 3) マーヴィン・ミンスキー(著)、安西 祐一郎(翻訳)『心の社会』(産業図書、1990年)
- 4) 千石 保『「まじめ」の崩壊』(サイマル出版会、1991年)
- 5) 本田恵子『せんせいのためのアンガーマネジメント』(ほんの森出版、2014年)
- 6) 常田美穂「乳児期の共同注意の発達における母親の支持的行動の役割」『発達心理学研究』(第18巻、第2号、97頁～108頁、2008年)
- 7) 古垣光一「教育におけるビッグファイブとオ

- キトシンの活用』『融合』(17 頁～21 頁、2016 年)
- 8) 門脇厚司『子どもの社会力』(岩波新書、1999 年)
 - 9) 門脇厚司『社会力を育てる - 新しい「学び」の構想』(岩波新書、2010 年)

子どもの「社会力」の獲得と親密圏としてのコミュニティづくりの必要性に関する研究

The study of the importance of fostering sociability and the development of communities as a private sphere for children

Toshinori TANAKA

【abstract】

In recent years, there has been an increase in child related issues such as bullying and violence in schools in Japan due to the weakening of human relationships as a result of an increase in number of nuclear families and scarcity of social interaction with local and professional communities. These issues have become increasingly difficult to resolve and is currently one of the most predominant social issues in Japan.

This book discusses the importance of creating new communities to support children in building sociability skills to address the recent decrease in children's opportunities for social skill development.

【key words】

child, educational problem, social skill, community

